

私立高志望の中学生増

青森県内 授業料補助後押し

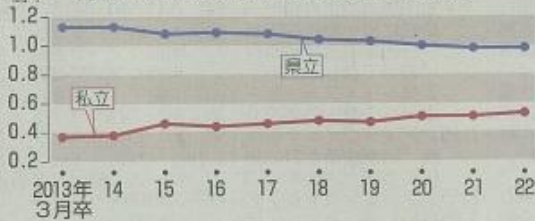
青森県内で私立高校を志望する中学生が増加している。2020年度から国の私立高校への就学支援金が拡充し、授業料に関して県立高校との負担差が縮小。私立ならではの教育課程や柔軟な指導体制に加え、スクールバスによる交通の利便性も背景にあるようだ。八戸市や三戸郡の中学校の教育現場からは「公立の、滑り止め」というイメージは、もはやなくなっている」との声が上がる。

（藤村大地）



八戸学院光星高の生徒が八戸学院大の講義を受ける高大連携事業。私立ならではの教育課程も注目を集める＝4月12日

青森県内中学生の進学志望倍率の推移



県教委がまとめた中学3年時の進学志望調査によると、13年3月卒業予定者で、私立の第1志望は募集人員に対して0・37倍だった。

多彩な教育、バス運行も背景

が、22年3月卒業予定者は0・53倍に増加。一方、県立の第1志望は13年が1・13倍、22年が0・98倍と減少しており、対照的だ。

県私立中学高等学校長協会の事務局は「各校からも私立のみを単独で受ける専願の受験生が増えたとの声が増えている実感がある」と説明する。

私立高校の授業料は、20年度から年収590万円未満の家庭に一律月3万3千円が給付され、実質無償となった。増額対象とならなかった年収590万～910万円の世帯についても、県が負担減のために独自に加算している。

授業料など金銭面のハードルが低くなったことで、中学生の進路の選択肢は拡大。八戸学院光星高の赤間俊勝教頭は「（私立は）授業料が高く、昔は特待生でなければ進学させないという保護者も多かったが、その

このところ顕著な中学生の私立志向。ただ、県立との差は依然として大きい。八戸市内の別の私立高は「志望倍率は0・5倍程度で、私立が選ばれているとは言えない。少子化で公立も定員割れする中、私立の魅力や強みをアピールしていきたい」と語った。

ような話は聞かなくなつた」と語る。

特色のある教育活動も注目を集める。各校は芸術や進学、部活動などに特化した学科やコースを設置。単位制を導入したり、系列大学と連携して高度な授業を提供したりしている。

近年は、中学生が自身の進路を見据えて私立単独で挑むケースも増加。赤間教頭は「以前は偏差値が最重要視されていたが、現在は子どもが自ら学ぶための自由度や選択の幅が見直されてきている。私立の開かれた校風も魅力的に映るのではないかと分析する。

スクールバス運行による通学の利便性も決め手の一つ。郡部では公立高の閉校に伴い、居住地外の高校に通う生徒も多い。私立は独自のバス網を編成し、公共交通機関では美家から通えない地域をカバー。利用申込者は増えているという。